



私がこの研修に参加したきっかけは、「下北BOUSAIネットワーク」という下北管内の高校生を対象に行われている活動の中で観た「Fukushima50」である。私の住む下北では、原子力という分野に触れる機会はほかの県や地域に住んでいる人よりも多いように感じるが、実際に原子力発電のあり方について詳しく探求をすることはなかった。しかし、この映画を見て、実際に2011年3月福島では何が起こっていたのかについて知り、ショックを感じたと同時に、安全な原子力発電を行うためにはどうすればよいのかと疑問に思い、原子力という分野に興味を持った。友人に原子力にどのようなイメージを持っているか尋ねたところ、「少し怖く感じるからほかの発電方法がいい。」という意見をもらった。

この返答をきっかけに、私の中でのテーマを「日本人と原子力発電が積極的に行われている国の人との意見の違いを見つける」というものに定めた。

実際に研修が始まり、事前研修として東通原子力発電所、日本原燃再処理工場を訪問した。そこで現在行われている安全対策や設備、再処理の方法など様々なことについて学んだ。そして出国前に各国大使館を訪問し、それぞれの国の地理的特徴や歴史的人物、エネルギー供給状況などについて学びを深めた。

そして実際にフランスのラ・アーク再処理工場を見学した。はじめ、施設の全体を見たときに、想像より小規模な施設である印象を受けたが、施設の大半が地下に埋まっているという説明を聞き、納得した。また、日本を含めた世界各国の使用済み核燃料を工場まで運搬する際は船を使って運ばれるが、ヨーロッパの中のものも鉄道で運搬されるという話を聞き、とても驚いたと同時に、安全性に対する不安も感じた。スウェーデンでは使用済み燃料については、再処理は一切行われていなかった。再処理に対しては、日本やフランスとは異なり、マイナスな考えを持っている人が多くいた。また、使用済み燃料を埋めた後に上にかぶせる石のようなものを見て、その粒は水を含むと密になり、水の侵入を防止することができるという説明を聞き、石自体は思っていたよりも軽く、とても驚いた。スウェーデンでは地震は起こらない。火山もない。しかし、実際に地震が起きたときにはどのような被害が出るかわからない、という話もあったため、世界各国で耐震構造や、地震が起こってしまった時の緊急時マニュアルを用意しておくべきだと感じた。

フランスは、原子力発電に頼ったエネルギー供給であるのに対し、スウェーデンでは水資源が豊富という特徴を生かし、水力発電が盛んに行われており、それ以外を原子力発電やほかの再生可能エネルギーで賄うという形のエネルギー供給がされており、とても理想的なエネルギーミックスの形であると感じた。

フランスの高校生との交流では、日本語を学ぶ学生と交流した。エネルギーについてのディスカッションでは、日本のエネルギー教育の疎さを感じた。私はずっとフランスの原子力発電に対する支持率の高さについてとても疑問に思っていた。しかし、幼いころから原子力施設の見学をしたり、広報誌を家に配っていたり、日常生活で原子力に触れる機会が多いことが、支持率の高さにつながっていると感じた。しかし、現状では原子力に頼りすぎているため、依存度を減らしていくべきだという意見も見られた。

そんな中スウェーデンでは、原子力が最も良いと考えている人が多かった。スウェーデンでは、2045年までに化石燃料の使用を廃止する目標が立てられており、目標達成に向けた取り組みが積極的に進められていた。そして文化交流の時間では、日本のおかしやけん玉、習字などの玩具を現地の高校生と楽しみ、とても有意義な時間を過ごした。

フランスを訪問した際は、自分の英語が本当に相手に伝わるかどうか不安であまりコミュニケーションがとれなかったが、スウェーデンではこの反省を踏まえ、怖がらずに積極的に話しかけるようにした。その結果、趣味や家族のことなど様々なことについて知ることができた。この経験から、何事にも怖がらずにチャレンジしていくことが大切であることを改めて感じた。

スウェーデンで訪問した環境保全地区では、「建築は建物を建てるだけが建築じゃない」という話を聞き、とても興味を持った。この地区では高い建物を積極的に作り、影を増やすことで夏期のエアコン使用を抑えている。また、屋根には植物が設置されており、直射日光を防ぐことで家の中が涼しくなるといった工夫が施されていた。植えられている植物などもすべて行政が管理しており、新しく植物を植える際も会議を通じてからだという。さらにスウェーデンは車の所持率が非常に低く、それに代わって、カーシェア用の車が街のいたるところに置かれていた。そして自転車を利用する人がとても多く、雪の中でも乗ることができるよう、自転車用の冬タイヤまでであるという。車の利用が少ないということはCO2の排出量が少ないということであり、それに加え、カーシェアなどで使用されている車のほとんどが電気自動車であるため、様々な点から自然の保護を行っている。

このような政策をモニタリングし、フィードバックする活動を繰り返し、地域住民や建築家の意見を聞くことでより良い都市づくりに努めていた。

そしてこの街ではThe 5minutes city という政策がとられていた。この政策はお店や幼稚園、バス、地下鉄などの生活に欠かせないほとんどすべての公共施設が家から5分以内の場所に設けられている状態にする政策のことである。この政策によって地域住民はとても生活がしやすくQOLの上昇にもつながっているのではないかと考えた。

このような研修のほかにも、ルーヴル美術館やモン・サン・ミッシェル、ヴェルサイユ宮殿など、世界的に有名な観光地へ行き、昔の人々の生活様式や、宗教についてなど歴史をはじめとした様々なことについて学んだ。

現在、フランスでは設備の老朽化や発電方法の分散化を目的として、原子力発電への依存度を下げる政策が進められており、現在約7割を占める原子力発電の割合を、最終的には5割程度まで抑えるという政策が掲げられている。

私は研修に参加する前、日本でもさらに原子力発電をさらに推進していくべきだと考えていた。しかし、地震の少ないフランスでさえ原子力発電が慎重に扱われている現状を知り、地震大国である日本が今後さらに原子力発電を推進していくためには、常にリスクと隣り合わせであることを十分に認識しなければならないと再確認した。同時に、国民の理解と賛成を得ることの難しさも強く感じた。

今後は、原子力発電とどのように向き合っていくのかを、より慎重に考えていく

---

ことが重要な課題であると思う。そして、核融合や二酸化炭素を利用した技術、大量の水を必要としない原子炉など、新たな発電方法の研究開発に力を入れ、日本が世界有数のエネルギー大国となれるような政策を推進していくことが望ましいと考える。

最後に、この研修に携わってくださった関係者の皆様に心より感謝申し上げます。

